

---

# 受験と単語帳の朝

りき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

受験と単語帳の朝

### 【コード】

N6292C

### 【作者名】

りき

### 【あらすじ】

受験を控えたある高校生の、いつもの通学電車での出来事。退屈な勉強だけの毎日が、一つの出会いから少しだけ変わっていく。

(前書き)

この作品は主人公の性別が決められていません。あなたの好きな設定でお読みください。あなたが男性なら、主人公を男性に。あなたが女性なら、主人公を女性に。もう一人の登場人物を異性にすると、作者の意図する設定になります。

「responsibility」

驚いて顔を上げる。

ん？ 今の、誰が言った？

毎日通学で使う電車の中で、初めて見た相手にそう言われた。

「『責任』 大学受験で覚える単語の中で、一番長い単語かもね」

「……？」

座席に座って捲っていた単語帳を覗き込むようにして、その高校生は立っていた。

驚いた顔で見返していると、一度にこりと笑って、それっきり窓の外を眺めている。

へえ。これが一番長いのか。確かに長い、これ。

そう考えると、これを覚えたら、もう覚えられない単語なんてないような気分になって、少しだけ嬉しい。

教えてくれてありがとう、と言っべきか悩んだが、なんだかそれもおかしな気がした。

その高校生も、それ以上何も言わなかったので、気にしないようにして次の単語に目をむけた。

大学受験を数ヶ月後に控えた受験生としては、唯一の致命的な弱みである英語を克服すべく、通学中も惜しまず勉強を続けていた。

いつもは眠気との戦いだが、今日は、ちょっとだけ違った気分で勉強できそうだ。

次の日。

今日は座れなかったので、車両の最後部で壁を相手に、単語の書き取りをしていた。

スペルミスは、何よりもつたない失点だ、と昨日の塾でも言われたからだ。

揺れる電車の中で、負けずに鉛筆を動かす事に必死で、すっかり昨日のことなど忘れていたところに、その謎の高校生は知らない間に側に居た。

「へえ。受験英語って、都市名も覚えなさいといけないの？」

振り向くまでもなく、すぐ横でノートを見ていた。

さすがに今日は知らん振りも出来ない。

一体どういうつもりなのか、という猜疑心と、単なる興味心。

しかし、勝ったのは昨日のあの一言のお陰で、勉強がはかどった事実。

実際、「responsibility」は完璧に覚えた。

相手にそんなつもりはないのだろうが、借りを作ったような気分だった。

「えと、アメリカの主要都市だけでも、と思って……結構出るらしいから」

「ふっん、なるほどね」

そう言って、より近くでノートを見ようと、顔を近づける。

「このPhiladelphiaさ。日本人がnativeに言うときは、フィラデルフィアって言っても伝わらないの。なんて言えれば良いと思う？」

なんだか楽しそうに話しているが、さっぱり見当も付かない。

「さあ……。受験にスピーキングは無いし……」

「『古豆腐屋』って言った方が通じるんだって」

「古……豆腐屋？ 古豆腐屋、古豆腐屋……へえ、面白い」

「でしょ？」

満員電車の中で大きな声は出せないが、つい笑ってしまう。

そこに、大きなターミナル駅からの乗客が、一気に乗り込んで来た。

自然に二人は別々の方向へと押し寄せられていく。

ちらりと目を合わせてすぐ、サラリーマン達の壁に隔たれる。

なんか、面白い。

一人になってからも、くすつと笑いが漏れてしまった。

古豆腐屋。へんなの。

そう考えると、おかしな事に、この単語だけは覚えたいと思ってしまっ。

英語という『科目』に一生懸命取り組んで来たつもりだったが、それは正直言えば、なんの楽しみも生み出さなかった。

元々、受験勉強に楽しみなんて付属品はないと思っていたのだから、それでよかった。

でも、いま勉強しているのは英語という『言語』のような気がする。

私たちが、伝えたい、心や気持ちを表す言語。

こうやって覚えると、楽しいんだな。

少しだけ、大の苦手科目『英語』に対する姿勢が変えられそうだと思うたら、やっぱりなんだか嬉しかった。

次の日も、その電車に、その高校生は居た。

名前はもちろん、どこの高校に通っているのかも、何年生なのかも、お互いの事は何も聞かなかった。

でも、毎日の電車での数分間の会話で、いつも英語を『勉強』から、『言葉』として見る為のきっかけをくれる。

楽しかった。

英語へのわだかまりも徐々になくなり、みるみる塾での成績も上がって行った。

これなら希望大学へも、余裕を持って望めるだろう、というお墨付きまで頂いた。

あの電車での毎日のお陰だと言う事は間違いない。

今日会ったら、お礼を言おうと思っていた。

しかし、いつもの駅に着いたのに、その姿を見つucker事はできなかった。

その日だけではない。

次の日も、その次の日も。

乗る電車変えたのかな。それとも、何か嫌な事しちゃったのかな……。

結局そのまま。

その日を境に、受験を迎える頃を過ぎても、もう一度会う事はなかった。

なぜ、毎日英語を教えてくれたのだろう。

その疑問すら、聞けていないのに。

数ヶ月後。

無事、第一志望の大学に合格し、今日が入学式を終えた初登校日だった。

まだ友達はいないが、希望と喜びに胸を溢れさせる。

正門をくぐると、早速先輩達のサークル勧誘の声が浴びせられる。嬉しくも恥ずかしい気持ちで足早に校舎へと歩き進む。

なにやらもみくちやにされてしまったが、やっと人だかりを抜けられ、一息つく。

「すごいなあ」

「That's crazy」

ん？

すぐ横で聞いた声に振り返る。

「ああ！」

「? oh, it's you!」

「この、大学の人だったの？」

「ああ、うん。というか、新入生だけど。ここに入ったんだ？すごい偶然！」

「本当だね！」

自然に笑顔が溢れる。

「何学部？」

「日本語学部、日本語学科」

「……え？日本語？」

「日本人だよ、真正正銘。でも、帰国子女ってやつ。半年前に帰ってきたんだ」

「ああ、そうなんだ。でも、日本語上手……」

「あはは、と白い歯を見せた。」

「楽しく覚えようと思って、朝から名前も知らない日本人の高校生に声を掛けて、話し相手になってもらった甲斐があったのかな？」

「それって……？」

見ると、毎日見せてきていた、あの楽しい笑顔を浮かべていた。

日本語をもっと覚えたかったから、話しをしたかった。

教えてもらっていた、と思っていたが、実は自分が教えていたということ。

日本語も、もちろん『科目』じゃない。  
英語と同じ『言葉』だから。  
きつと、そう言う事なんだろう。

「毎日相手してくれて、どうもありがとう。お陰でこの大学入れた」  
「そんな、それはこっちの台詞です。どうもありがとう」  
一拍置いて、二人はどちらからとも無く笑い出した。  
あの毎日を思い浮かべて、電車ではいつも抑えていた分、今、大声で笑い合った。

まだ、あの時の単語帳は持っている。  
受験をいい思い出にしてくれたことに、感謝してるから。

わり

終

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6292c/>

---

受験と単語帳の朝

2009年3月24日11時09分発行